# 讀詞叢考

中田勇次郎著

中田勇次郎著

〔東洋學叢書〕

# 讀詞叢考

刊行　創文社

**中田勇次郎**（なかた・ゆうじろう）

1905年京都市に生まれる．1935年京都帝國大學文學部支那語學文學科卒業．元京都市立美術大學學長．京都市立藝術大學名譽教授．專攻，書道史・中國文學．1998年10月23日死去．

〔編著書〕『譯注詞選』『宋代の詞』（以上，弘文堂書房），『歷代名詞選』（集英社），『書道藝術』（中央公論社），『中田勇次郎著作集』全10卷『中國書論大系』『黃庭堅』（以上，二玄社）など．

〔讀詞叢考〕

一九九八年一二月五日　第一刷印刷
一九九八年一二月一〇日　第一刷發行

著者　中田勇次郎
發行者　久保井浩俊
印刷者　藤原豐

發行所　株式會社　創文社
〒一〇一-〇〇五一
東京都千代田區麴町二-六-七
電話〇三-三二六三-七一〇一
振替〇〇一二〇-〇-九二四七二

（著者との申し合わせにより檢印省略）

藤原印刷・鈴木製本

ISBN4-423-19246-2　Printed in Japan

# 讀詞叢考序

本書は中國の韻文學において極めて重要な位置を占める詞について、様々な視點から研究を行ってきたこれまでの成果を集成したものである。「詞人論」「詞集」「詞律」「翻譯」と題記をなして四部に分け、各部に四、五篇ないしは十篇の論文、翻譯を配した。往年發表したものに併せて一部未發表の論文や翻譯がある。各篇さらに考究すべき餘地や現今の詞學の成果を取り入れるべき箇所も存するが、今は舊稿に僅かの修訂を施すに止めた。また中に零細なものも加えたが、このように編し終え、改めて全體を見ると、多大な內容を有するに至ったものであると心竊かに思われる。顧みれば昭和十一年に雜誌「支那學」掲載の「兩宋詞人姓氏考」「唐五代詞韻考」を初めて世に問うてより、平成八年に「南宋詞の特質」を發表するまで六十年に及ぶ。この間の論考がようやく一書にまとめられ出版する日を迎えた。深い感慨を禁じ得ない。

我が國の詞學研究が盛んになることを久しく望んできたが、本書がそれに寄與し得るならば實に有り難い。詞は美しく樂しい文學であり、こまやかな色彩に富む文學である。今後、この道を深く尋ねるすぐれた研究者が多く現われ、詞學を大きく充實されんことを期待するものである。なお原稿の編集・修訂および校正は萩原正樹・芳村弘道兩君に協力を求めた。ここに本書が廣く世に傳えられることを願う次第である。

平成十年上巳の日心花室にて識す

中田　勇次郎

# 目次

讀詞叢考序……i

## I 詞人論

一 溫庭筠の金荃詞……五
二 秦淮海詩文年譜……一七
三 辛棄疾……四七
四 姜白石について……五〇
一 姜白石……五〇
二 姜白石の梅の詞……五五
三 姜白石の詩說……六六
五 詞人納蘭性德……七四
六 兩宋詞人姓氏考……九〇
附 歷代詩餘兩宋詞人姓氏補遺
七 南宋詞の特質……一三四



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

## Ⅱ 詞集

一 花間集……一三九
二 雲謠集雜曲子……一五一
一 敦煌寫本雲謠集雜曲子……一五一
二 雲謠集雜曲子の詞體……一六四
三 その他の敦煌の雜曲子……一八六
結 語……一九三
三 草堂詩餘の版本……一九七
序……一九七
一 源 流……一九八
二 分類編次本……二〇三
三 分調編次本……二三九
四 總 說……二五四
五 刊 本……二五九
四 草堂詩餘研究資料……二七五
一 洪武本草堂詩餘詞人校訂表……二七六

二　分類編次本草堂詩餘詞人姓氏表……二八七
三　分類編次本詞話一覽表……二九一
四　陳繼儒本七十八首詞表……二九三
五　沈際飛本二十首詞表……二九六
草堂詩餘版本目錄（略）……二九七
五　清初詞選刻板考……二九九
六　白樂天の文殊讃……三一七
七　魚山の詩餘……三三五
八　わが國にて歌われた詩餘……三三九
九　道藏に見える詩餘……三四一
十　中國の佛教歌謠……三五〇
序　說……三五〇
一　南陽の老婆經……三五五
二　佛號を伴う民歌……三五八
三　拜菩薩、拜觀音、拜彌陀……三六〇
四　僮　子……三六二
五　男女の戀愛に關する民歌……三六四

六　挽　歌……三六五
七　年中行事に關する民歌……三六七
八　和尚頭……三六八
九　尼姑下山……三七〇
十　和尚に取材した童謠……三七三
十一　滑稽歌……三七五
結　語……三七六

## Ⅲ　詞　律

一　唐五代詞韻考……三八一
二　唐五代詞韻譜……四一六
一　花間集韻譜……四一七
二　花間集押韻形式分類表……四二四
三　花間集句法形式……四二九
四　句法形式分類解說……四四六
五　尊前集韻譜……四四八
六　尊前集押韻形式分類表……四五八
七　尊前集句法形式……四六一

三　唐五代詞の韻律について……四六四
四　詞律に見えたる重疊韻の例について……四八二
緒　言……四八二
一　疊　句……四八七
二　疊　韻……四九六
三　疊　字……五〇三
四　二疊韻以上の例……五〇七
五　隔句の疊韻……五〇八
六　隔段の疊韻……五一二
七　重　韻……五一五
結　語……五一七

## Ⅳ　翻　譯

一　花間集の詞人……五二一
一　韋莊の浣花詞……五二一
二　牛嶠の詞……五四〇
三　顧夐の詞……五四六

四　毛熙震の詞……五五三
五　蜀の詞人李珣の瓊瑤集……五五九
六　歐陽炯と薛昭蘊……五六九
二　花間集より……五八四
三　南唐二主詞……六一九
四　宋元の詞論……六四五
一　沈義父『樂府指迷』……六四五
二　張炎『詞源』巻下……六五四
三　元・陸輔之『詞旨』……六七四
後　記……芳村弘道・萩原正樹……六七七
掲載誌一覽……六八三
歐文目次……1
人名索引……7
書名索引……28
詩題・詞牌・曲名……40
引用詩詞索引……61

# Contents

Preface ····· i

## I *Ci* Poets

1 "*Jin Quan Ci* (金荃詞)" by *Wen Ting Yun* (溫庭筠) ·····5
2 A Literary Chronology of *Qin Guan* (秦觀) ·····17
3 *Xin Qi Ji* (辛棄疾) ·····47
4 On *Jiang Kui* (姜夔) ·····50
5 *Na Lan Xing De* (納蘭性德) ·····74
6 A Study of the Name of *Ci* Poets in *Song* Period ·····90
7 Chracteristics of Southern *Song Ci* Poetry ·····124

## II *Ci* Texts

1 "*Hua Jian Ji*-Among the Flowers (花間集)" ·····139
2 About "*Yun Yao Ji Za Qu Zi* (雲謠集雜曲子)" ·····151
3 On the Texts of "*Cao Tang Shi Yu* (草堂詩餘)" ·····197
4 The Research Data for "*Cao Tang Shi Yu* (草堂詩餘)" ·····275
5 The Anthorogy of *Ci* Poetry in Early *Qing* Dynasty ·····299
6 "*Wen Zhu Zan* (文殊讚)" by *Bai Le Tian* (白樂天) ·····317
7 *Ci* in *Yu Shan* (魚山) ·····335
8 On *Ci* Recited in Japan ·····339
9 *Ci* Poetry in "*Dao Cang* (道藏)" ·····341
10 Chinese Buddhistic Songs ·····350

## III *Ci* Measures

1 A Study of the Rhyme of *Ci* Poetry in *Tang* and *Wu Dai* Period ·····381
2 A Table of the Rhyme of *Ci* Poetry in *Tang* and *Wu Dai* Period ·····416



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

3 On the Measures in *Ci* Poetry on *Tang* and *Wu Dai* Period ……464
4 The Reiterative Rhymes in "*Ci Lü* (詞律)" ……482

IV Translation

1 *Ci* Poets in "*Hua Jian Ji*-Among the Flowers (花間集)" ……521
2 Selected Poems from "*Hua Jian Ji*-Among the Flowers (花間集)" ……584
3 *Ci* Poetry by Two Emperors of Southern *Tang* ……619
4 Essays on *Ci* Poetry in *Song* and *Yuan* Dynasty ……645

Editors' Postscript ……677
A List of the Dates of Articles Published in Periodicals and Books …683
Index ……5-64

# 讀詞叢考

# I

# 詞人論

# 一 溫庭筠の金荃詞

いずれの文學にもそれぞれ特有のにおいがあるものである。詞にもまたそのもちまえのにおいがあるばかりではなく、そのにおいのうちには、ほかの文學には見られぬ格別のうつくしさがある。そのうつくしさをわれわれは香豔ということばでいいあらわしている。あるいはさらにうつくしく綺羅香豔ということばをもちいていいあらわしている。このことばは、とくに唐末から五代にかけて行われた小令についてもちいるのに、たいそうふさわしいと思われる。いまその小令のもっともたくみであった詞人を算えるならば、それにはまず溫庭筠に第一指を屈しなければならないであろう。

詞は盛唐の燕樂より生まれいで、中唐の詩人にはぐくまれ、晩唐におよんではじめてその獨立したすがたをとのえるようになったもので、庭筠は唐の末葉にいでて、清商の哀音を追い、胡夷の新聲を採りつつ、ついに詞のおもむきにたぐいのないうつくしさを附與し、詞のしらべにただしい韻律を定めた詞家である。これより詞はそのはなやかな第一頁より鏤玉雕瓊、裁花剪葉のたくみをつくしつつくりひろげられてゆく。

庭筠には金荃という集があったという。けれどもこれはすでに佚して傳わらない。いま、後蜀の趙崇祚の編した花間集のうちにおよそ六十六闋おさめられているのがその作の主なものである。このほか尊前集、草堂詩餘などに收められているものをあわせると、かれの作はいますべて七十闋を存している。ここにそのうちから溫詞の



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com